

かけだしの頃

今だから話せるゲンバの失敗



佐藤工業株式会社 東京支店 板橋シールド作業所
現場代理人・監理技術者（作業所長） **南雲 義行**



1992(平成4)年、佐藤工業株式会社に入社。以来、トンネル工事や造成工事、推進工事、共同溝工事などに従事。現在、板橋シールド作業所長を務める。

万全な準備をして心にゆとりを持つ

入社して8年目、共同溝工事に管理責任者として従事していたときのことです。この工事は、地下開削のため、夜間に国道の4車線を2車線に規制したうえで進めていました。

工事は順調に進み、土留杭を打設していたときでした。杭打ちが予定通り完了し、あとは覆工板を閉めて規制を解除するだけという段階で、覆工板が閉まらないという事態が起きました。覆工板が閉まらないということは、たまに起こる事象であり、なおかつ規制解除時間まで余裕があったので、深刻にはとらえず、規制解除までに覆工板を閉めておくよう指示を出し、他の作業の進捗確認を優先させました。

しかし、他の確認作業を終え、規制解除の準備ができた段階になっても覆工板は閉まっていませんでした。慌てて対策を講じ、覆工板を閉めることができましたが、時すでに遅し。規制解除時間が過ぎ、気付けば道路は大渋滞。通常でも交通量の多い道路の開放が遅れたことで通勤や物流輸送などに大きな影響を与えてしまいました。

確認不足と判断ミスが招いた失敗でした。日中は車両が通行するところに設置していた仮覆工であったため、通行車両の重量で桁が内側に寄ってしまい、覆工板が閉まらなかったというのが今回の原因でした。あとで確認した話では、

覆工板を開ける段階で引っ掛かりがあったそうです。事前にその情報を認識していれば、防ぐことができたかも知れません。また、覆工板が閉まらないという事象が起きた段階で具体的な指示をしていれば、慌てずに対処できたかもしれません。一つの判断ミスが社会に大きな影響を与えることにつながることもあるのです。責任者である以上、すべてのミスは自分に返ってくるということを痛感しました。失敗してとても悔しかったことを今でも覚えています。

同じ轍は二度と踏まない。この経験を機に、覆工板が開きにくい、閉まりにくいということのないように、覆工板の開閉がスムーズにいくよう最初から広めに掘削するなどの対策を講じてから作業に入るようにしています。また、今回の事例に限らず、事前にリスクを洗い出し、最悪の事態を想定した中でリスクを回避できる対応策を考えることが大事です。大丈夫だと思っても必ずリスクはあります。準備をしっかりとっておけば気持ちに余裕ができると思います。そのゆとりが冷静かつ慎重な判断につながると肝に銘じています。若手の人たちには、物事に絶対はないということを理解したうえで、自分はいかなる状況があっても対処できるという自信を持って仕事に取り組んでもらいたいです。